

【 追 悼 】

大塚良平先生を偲んで

昭和53年度の本学会会長で、早稲田大学名誉教授大塚良平先生が、去る1月7日夕刻虚血性心疾患で逝去された。73歳であった。先生は、第28回熱測定討論会実行委員長やICTAの組織委員等を歴任され、本学会創生期のみならず学会の前身である熱測定研究会の時代から、学会と熱分析の発展に大変尽力された。先生の御紹介を兼ねて、ここでご業績を偲んでみたい。

先生は大正11年に東京に生まれ、昭和25年に早稲田大学第一理工学部採鉱冶金学科を卒業された。昭和32年同大学助手に採用され、専任講師、助教授を経て、昭和42年教授に昇任され、平成5年に大学を退任されるまでの36年間の長きに渡って、教育と研究に専念された。熱分析に関しては、熱天秤を最初に考案された本多光太郎先生の直弟子で、早大客員教授をされていた齊藤平吉先生から熱天秤を学ばれたとお聞きしている。私をご指導頂いていた昭和40年代始めのころは、当時はデリバトグラフと呼ばれていた図体が大きなTG-DTG-DTA装置が研究室の目玉装置であった。この装置を用いて、鉱物の熱分析を研究されていた。先生は多彩な研究をされたが、この中で、粘土鉱物の熱分析はライフワークであり、大きな業績を残された。セピオライトやバリゴルスカト等の鎖状粘土鉱物、新たに発見された特異な粘土鉱物のスーライト (Surite) やMg系粘土鉱物を鉱石から根気よく分離、選別され、産地によって複雑に変化する脱水機構や速度論を体系的に明らかにされた。また、ゼオライト、層状ポリ珪酸塩、ドロマイト系鉱物等の工業原料鉱物やアパタイトの分解反応の動力学について多くの発表をされ、内外にその業績を知られている。ゼオライトは研究室の後継者の山崎氏 (早大助教授)、熱分析の新技术は小棹氏 (湘北短大助教授)、粘土鉱物は坂本氏 (岡山理科大教授) らが引き継いで研究している。一方、鉱物の物性にも興味をお持ちで、黄鉄鉱の半導体的性質に関する研究で学位を取得された。筆者は、その関連で磁硫鉄鉱の高温熱容量の測定を修士論文のテーマに頂いたことが熱測定との最初の関わりで、以来、熱測定に近い分野で仕事をすることになった。

先生は、日本熱測定学会以外にも、日本粘土学会、日本鉱物学会、日本セラミックス協会、あるいは政府の専門委員や大学役員など多くの分野で活躍された。特に日本粘土学会に関しては長い間事務局として面倒を見られ、昭和59



年度の日本粘土学会会長を務められた。大学教育にも大きな足跡を残されている。地球科学としての鉱物学を応用分野で活用するために、鉱物工学を提唱され研究と教育を推進された。学生に対して恐い先生であるよりも誠実で兄貴のような暖かさで接しておられた。多くの学生に慕われ、研究室の出身者は190名を越える。昭和41年の学費値上げ反対闘争のとき、筆者らは卒論提出拒否を決めたが、先生は夜遅くまで学生と情熱を傾けながら対話され、その人柄のために、我々は1週間で反対運動の旗を降ろしてしまったことを今となつては懐かしく思い出す。

3年ほど前に70歳で大学を去られてから、体調を崩され自宅で静養されていたが、まったく突然の訃報であった。3年余り前の第28回熱測定討論会で先生のお手伝いをしたことがつい昨日のように思い出される。お好きなビールをご一緒にしながら相談したいことが沢山あったのに、心の支柱が突然折れたような気持ちがまだ消えない。心からご冥福をお祈りする。

(無機材質研究所 三橋武文)